
君が隣にいた季節。

由野英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が隣にいた季節。

【Nコード】

N5978D

【作者名】

由野英

【あらすじ】

叶わないなら、恋しなければ良かった？永遠に続きそうで瞬く間に過ぎていく夏の日。切なくてほろ苦い恋物語。

s c e n e 0 ・ 夏の始まり

行ってきますの一言すら無しに、私は家を飛び出した。

自転車の鍵、水筒、お気に入りの文庫本、それだけを持って。

自転車の鍵を外し、水筒と文庫本を前カゴに放り込む。

ストッパーを倒してサドルに跨り、ペダルを踏み込んだ。

風鈴の音がどこから聞こえた。

今年も、夏が始まる。

夏の陽射しがじりじりと首筋を焦がしていく。

外の空気は湿気を含んで生温く、体にまとわりつくようだ。

止むことのない蝉の鳴き声は、余計に暑さを感じさせる。

数メートル先のガードレールが遠く揺らいで見えた。

私は腕で額に浮かんだ汗を拭い、黙々とペダルを漕いだ。

家を出てから、もう三十分程は経っただろうか。

ずいぶん遠くまで来たような気がする。

ごちゃごちゃと店が立ち並ぶ家の近所とは違い、この辺りで建物らしいものと言え、数分前に通り過ぎた神社といくつかの古い家くらいだ。

カゴの中の荷物たち 主に水筒 が時折ガタガタと音をたてる

のは、舗装がされていない田舎道だから。

小さな振動に揺られながら、私はペダルを踏む力を強くする。

前カゴは、ガタンといっそう大きな音をたてた。

まだ、行き先は決まっていない。

暫くして道を右に曲がった。

緩やかな傾斜を上っていく。

舗装された道に入り、ようやくカゴは静かになった。

視界の端に映る、ガードレールの白が眩しい。

あとどれくらい走ろうか。
あまり遠くまで行くと、家に帰る時間が遅くなる。
そうなるその後が面倒だ。
姉や兄からはうるさく行き先を訊かれるだろうし、弟たちに明日からついてこられても困る。

私の家は所謂大家族というやつで、兄、姉、妹が一人ずつと、双子の弟たち、あわせて五人の兄弟がいる。

普段は皆それぞれ学校へ行っているのでそれほどでもないのだけれど、夏休みのような長期休暇は、自分の部屋でさえ落ち着いて読書をする事が出来ない。

何故って、とにかくうるさいのだ。
私が本を読んでいる最中に、横から朗読してきたり、本当にどうでもいいくだらない話を延々としてみたり、わざわざ隣でプロレスごっこをしてみたりと、鬱陶しいったらない。

だから私は、心置きなく読書を楽しむ為、この休みは家にいないことにしたのだ。

最初は、図書館かショッピングモールのフードコートへ行くつもりだったのだけれど、何となくそれではつまらない気がしてやめた。
本を読む場所につまらないも何もないかもしれないけれど、せつかくの夏休み、どうせならいつも行かないような場所、行ったことのない場所へ行ってみたかった。

s c e n e 1 .

傾斜を上りきると、道は二手に分かれていた。

そのまま進めば、民家の集まりへ続くらしい下り坂の道、左へ曲がると舗装のされていない、林の奥へ続く狭い一本の道がある。

私は二つを交互に見比べ、そして自転車を降りた。道の端に寄せて止め、鍵をかける。

自転車に乗ったままでは、流石に無理そうだった。カゴから文庫本と水筒を取り出して、左に進んだ。

この道の先に何があるかは分からないけれど、坂を下った先には何も無いことは分かっていた。

何も無い道を進むよりは、何があるか分からない道を進む方が、面白いにきまっている。

そりゃあ、奥が見えない道だし、少しの不安もないなんてことはない。

けれど、夏休みに少しの冒険はつきものだ。

少なくとも、小説の中では。

それに比べればこんなこと、冒険というにはささやかすぎるくらいだ。

問題なのは、せいぜい道に迷うかどうか……それも方向感覚には自信があるし、きっと大丈夫だろう。

辺りは薄暗くひんやりとしていた。

鬱蒼と繁る木々は、どことなく湿っぽい。

しんと静まった場所に私の足音だけが聞こえる。

此処には蝉がいないらしい。

蝉どころか、鳥の鳴き声すらしなかった。

此処にいるのは沈黙した木々たちだけ。

右を見ても左を見ても、その他には何も無い。

かろうじて、後ろを振り返れば私の赤い自転車が見える。

きよろきよろしながら歩いていたら、足元の小石に躓いた。

「うわ」

前のめりになった体を立て直し、一人で照れ笑いをした。

誰も見てないとはいえ、今のはダサすぎる。

道は私一人がちょうど通れる位の狭さだ。

勿論壁があるわけではないので、足元のみなことだけれど。

人工的に作られた道というより、多分沢山の人間（もしくは動物）に踏まれて出来た道のような気がする。

黙々と道なりに歩いていると、何メートルか先に急に道が開ける所があるのが分かった。

私は歩くペースをあげた。

s c e n e 1 .

眩しい。

ふつつりと林が途切れ、狭かった道が開けた。

道の横は両方とも空き地だ。

茫々と草が生え、子供が遊んだ形跡もない。

私が小学生のときは、こういう空き地でよく遊んだのだけれど、今の子はそんなことしないんだろうか。

なんだか少し、寂しい。

私は自転車が無いことを悔やみつつ、随分広い空き地を横目に道を進んだ。

涼しかった林の中で乾いたはずの汗が、また流れ始める。

歩いている内に、向こうの方にコンクリートの建物があるのが見えた。

伸び放題の中に建つ四角い灰色のそれは、何だか異質な感じがして、そこだけ空気が違って見える。

面白そうな場所だ。

草むらの中にあるコンクリートの建物。

コンクリならきつとそんなに暑くない、彼処ならいいかもしれない。

私は思わずにっこりした。

コンクリートの建物は、三階までであった。思ったより中は広い。

学校の教室と同じくらいの高さだ。

この建物は長方形だったから、二階も三階も同じだろう。

電気がつかないので薄暗く、窓の近づくだけが明るかった。がらんとして、物は何もない。

生暖かい空気がどんよりと沈んでいた。

此処は元々何なのだろう？

私は周りを見回した。

景色は何も変わらない。

コンクリートでできた巨大な箱。

紙屑一つ落ちていない、空っぽの箱。

そうとしか言いようがなかった。

何かの小説で、こういう場所なかったっけ？

確か、男の子の幽霊が出てくる話。

その話の最後は……そう、主人公がとり憑かれて殺されるんだった。

急に背筋がぞくりとして、寒くなる。

「……………馬鹿らし」

私はふんと頭を振って二階へ上がった。

s c e n e 1 .

二階は一階と全く同じづくり　つまり何もないただの箱　だった。

たいして見るものもなかったので、私は二階には長居せずに、更の上へ向かった。

三階も、部屋の形は同じだった。

ただ一つ違ったのは、入り口と反対の奥の壁に、本来あるはずのコンクリートはなく、その代わりに貧相な鉄の柵が付けられていたこと。

ぐいぐいと前に押ししてみたけれど見た目より丈夫なようで、簡単には外れない。

思い切り柵の根元の方を蹴ってみても、私の足の指がじんじんと痛む以外は何の変化もなかった。

柵の高さは私の胸の辺りまで。

もたれるにはちょうどいい高さだったけれど、流石にそれをする勇氣はなかった。

確かに蹴ったり手で押ししたりしても動かなかったけれど、体重をかけて、万が一落ちたりしたら……想像するのも嫌だ。

少なくとも、無傷で済むなんてことは有り得ない。

ともかく、私は一番明るいこの柵の周りで読書をすることに決めた。一階や二階よりはずっと風通しがいいし、柵の隙間から林や草だらけの空き地を見下ろすのは何だか気分が良かった。

三階なんてたいした高さじゃないと思っていただけけれど、この建物は各部屋の天井が高いようで、友達が住んでいるマンションの三階か

ら見た景色より、いくらか高いような気がした。

それか、高層ビルやマンションが視界に入らないからかもしれない。
ここと違い、街の空は狭く、暗くなっているから。

こんなに綺麗に広がる空は、私の家や友達のマンションから見られない。

私は持ってきた文庫本を取り出した。

表紙に描かれた少年は、民族衣装のような服を着て、飾りのついていない短剣を真っ直ぐにこちらへ向けている。

というこの本は、先週発売されたばかりのもの。

作者の名前は東海林なづき、今私が一番気に入っている作家だ。

デビューしてまだ日の浅い新人作家だけれど、そんじょそこの小説家たちよりよっぽど面白いものを書く人だと思っている。

彼女の作品との出会いは、装丁が気になって立ち読みしたデビュー作。

夏までの距離というその青春小説は、文章も内容も、私好みだった。五頁ほど読んだところで私は本をレジへ持っていき、家へ帰ってすぐに続きを読み始めた。

途中で弟たちに邪魔をされても、数少ない鍵のついた場所である風呂場に避難しながら、ただひたすら読んだ。

もう一年以上前の話だ。

それでも、読み終わった後の清々しさと寂しさはまだ忘れられない。彼女はそれからずっと、私の一番お気に入りの作家だ。

最新作（つまりこの本）は、私がめったに読まないジャンルであるライトノベル。

それでも、彼女の作品ならばと思い切って買ってみたのだ。

彼女の作品ならハズレはないはず。

ハズレどころか、きっと私が想像もできないような創造的な世界を魅せてくれるに違いないのだ。

私が期待を膨らませ、にやにやしなから本の頁をめくろうとしたとき、微かにコツンと音がした。

そら耳？

いや違う、だって今も聞こえた。

コツン、コツンと、その音は段々近づいてくるようだ。

「なんですかこの音怖いんですけど」

怖さを誤魔化すように半笑いで独り言を言ってみても、なにも効果がない。

むしろ自分の声が妙に響いて余計に怖くなった。

しまった、バカだ私。

そのうえ、昔読んだホラー小説のことを再び思い出してしまったりして。

線の細い男の子の幽霊が私を殺そうとする様子が頭に浮かんで、私は頭をぶんと振った。

これはどう考えても足音だ。

幽霊に足はない、だからつまりこの音の主は幽霊じゃない。

……でも、それなら何？

そんなことを考えている間にもコツンコツンという音はどんどんこっちへ近づいてくる。

私は本を横において息を殺して私が入ってきたドアをじっと見つめた。

頭の中でどくどくと血が巡っている。

足音はすぐそばまで近付き、そしてドアノブがギギツという嫌な音

をたてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5978d/>

君が隣にいた季節。

2010年10月28日05時40分発行